

多喜二の逮捕 そして スパイ

倉 田 稔

もくじ

はじめに

1 逮捕

2 多喜二を売った男

3 戦前日本共産党とスパイ

はじめに

本稿は、小林多喜二伝（36）である。

1 逮捕

1933（昭和8）年のたしか2月のはじめであった。江口渙は、作家同盟の幹部たちへの面会と差入れの許可をえるため 警視庁特高第二課へ交渉に行った。ところが用件をかたずけてさっさと帰ろうとすると、中川成夫〔警察官〕はにわかには言葉の調子をあらためて、

「江口君、ちょっと話があるから待ってくれ」と、ひどくすごんだ目つきで江口をにらみつける。なんのこともか見当がつかないので、江口も思わず中川の目をみつめる。

「江口君。きみは小林多喜二と始終連絡をとっているだろう」

「バカなことをいうもんじゃない。小林とのあいだには連絡なんか絶対にない」

江口はほんとうのことをいうのだが相手は承知しない。

「小林多喜二のやろう。もぐっていやがるくせに、あっちこっちの大雑誌に小説なんか書きやがって、いかにも警視庁をなめているじゃないか、こんど連絡があったら、このことだけははっきり小林に伝えておいてくれ。——いいか、われわれは天皇陛下の警察官だ。共産党は天皇制を否定する。つまりは天皇陛下を否定する。おそれ多くも天皇陛下を否定するやつは逆賊だ、そんな逆賊はつかまえしだいぶち殺してもかまわないことになっているんだ。小林多喜二もつかまったが最後ののちはないものと覚悟していると、きみから伝えておいてくれ。このことだけは、やつがつかまらない今のうちからはっきりいっておくからな。いいか、連絡であのやろうにあったら、忘れずに伝えてくれ！」

しゃべっているうちに、だんだん興奮してきた中川の顔には、隠しきれない怒りとにくしみがあふれてくる。その表情の動きから見てとうていたんなるおどしとは考えられない。げんに、その前にも共産党の中央委員の岩田義道は、彼らの残忍きわまる拷問にあつてむざむざいのちを奪われている。さらにそのだいぶ前にも中央委員の上田茂樹が警察につかまったまま行方不明になってしまつて遺体さえも帰つてこない。それらのことを思い合わせると、怒りとにくしみをこめて江口にぶつつけた中川成夫の言葉はけっしておどかしではない。小林多喜二もつかまったが最後どんなにひどいことにならないと誰が保証できるだろう。¹⁾

小林多喜二は、この日、2月20日、逮捕される日、2つのアポ〔イントメント〕の約束があった。

午前中に渋谷区羽沢町のかくれがを出た多喜二は、今村恒夫に正午すぎに福吉町の喫茶店で会うことになった。今村恒夫（本名、久雄）は、1908（明治41）年1月15日生まれ、1936（昭和11）年12月9日没した。福岡県嘉穂郡生まれで、日大専門部中退であった²⁾。今村は、作家同盟員で、当時その東京支部書記局

1) 江口渙『たたかひの作家同盟記』下、新日本出版社 1976年、253-4ページ。

員であった。共青——共産党の青年組織、正しくは共産青年同盟——に入り、1932（昭和7）年に入党した。つまり入党は多喜二より少し遅い。多喜二はこの時、作家同盟書記長だった。

「1933年（昭和8年）2月20日の正午すぎ、多喜二は、赤坂福吉町の飲食店で、今村恒夫と連絡でおちあった。そこは赤坂花柳街の裏路地にある小さな粋づくりの店だった。」

「その日、2人は、共産青年同盟の指導部にいた三船留吉と連絡をとって、ゆっくり時間をかけて会合をもつ予定であった。

今村は文化団体内の共青グループの責任者で、『赤旗』の配布をうけもっていた。その日の会合は三船の提案だった。三船は今村をつうじて、しばらく前から多喜二と3人の会合をたびたび申し入れていた。

まもなく、多喜二はその店をでて、今村の案内で、2階建ての待合街の狭い裏路地を溜池の方へ向かって歩いていった。ところどころ、路地にそって粗末な平屋づくりの荒い格子窓の古びた芸者置き屋が軒を並べていた。このあたりは昼間はひっそりとして、人通りも少なく、そのころの地下活動家たちに比較的連絡につかわれていた場所であった。

うす曇りの寒い日だった。多喜二は、和服で外出するときのいつもの身なりで、変装用のロイド眼鏡をかけ、鼠色のソフトをかぶって、大島銘仙の着物に二重回しを着ていた。

三船との連絡場所は、そこからはどちかくの飲食店だった。2人は約束した時刻にその店に入った。しかしそこには、三船のかわりに、築地警察の特高刑事たちが張り込んでいた。多喜二は溜池市電停留所付近で逮捕された。³⁾

その直後の『赤旗』は書く。（現代字で表す）「二月二十日正午頃、同志小林は赤坂福吉町の街頭で連絡中、待伏せしていた数十名の築地署スパイに襲はれた。敵の隙をうかがって附近を約二〇分も逃れたが、遂に敵の網にかかり、激

2) 作品の一部は、『日本プロレタリア文学集』39、「プロレタリア詩集2」新日本出版社1987年、46～55ページにある。なお、『今野大力・今村恒夫詩集』がある。

3) 手塚英孝『小林多喜二』下、新日本出版社 1976年、121-2ページ。

しい格闘の末、捕えられた。彼らは氣力を失った同志をがんじがらめに縛り上げ、抵抗力のないのにつけこんで打つ蹴るの凡ゆる暴力を加へかうして全く死んだ様になつた同志を築地署に運び込んだ。」

「三船留吉は前年（1932（昭和7）年）十月のいっせい検挙の際、地下組織にしのみこんだ秘密警察のスパイの一人であつた。」⁴⁾ いっせい検挙とは、10月30日の熱海事件および同日の中央委員らの検挙のことである。これらはスパイ松村の手びきで行なわれた。全国代表者会議が熱海で行なわれることになつたが、中央指導部は急に出ないことになつた。だから地方代表者たちだけが検挙された。しかし、すぐまた中央指導部も検挙された。三船はしかし、後に詳述するように、この事件の際にしのみこんだ者ではなかつた。

小林多喜二を売った（=警察に渡した）男は、ここにあるように三船留吉である。本名だとされている。党名は、佐原保治とあり、ペンネームが賀川、香川、武田、水原といった。多喜二も、だから、武田あるいは香川と会う、というつもりだったろう。

逮捕の次第は、くわしくは、こうであつた。

そこ〔店〕に3人の刑事がいた、つまり張り込みをしていた。その日、雨がふっていた。そして道がぬかるんでいた。多喜二は、下駄に和服、羽織、もも引き、中折れ帽を被り、今村は洋服だった。多喜二と今村は逃げた。刑事は追いかけた。「ドロボー」と言った。ガレージに働いていた工具が多喜二を捕まえた。12時20分ごろ捕まった。40分、築地警察へ連行された⁵⁾。刑事は、こういう場合、ドロボーと言うように指導されていたのだらう。

江口によると、こうである。

〔小林多喜二らが、〕指定されてあつた喫茶店を覗くと、特高とおぼしい背広姿が三人もいる。「これはいけない」と思った二人は、すぐさまとってかえ

4) 手塚英孝；その他、『日本共産党の六十年』99ページ；松本清張『昭和史発掘』5，文春文庫 1978年，264ページ。松本は、ここでの話をほとんど手塚に負っている。

5) 井上ひさし講演，小樽 1998年2月20日。

すと、三人の背広もたちまち往來に飛び出してきてあとを追う。二人は逃げた。同じ方向に逃げた。ことに小林は和服姿に下駄ばきで二重まわしまで着ている。おまけに道がひどくぬかっている。赤坂の電車通りまで逃げたとき、洋服で靴をはいている今村よりもすでに20メートルほど遅れていた小林はすべってころんだ。とたんに特高の一人が二重まわしの羽織をつかむと、小林は足袋はだしになり下駄を両手にもって打ってかかる。もうそのときにはあとの二人の特高も小林を囲んでいた。それを見た今村はすぐにとってかえし、特高たちの中に割って入って、相手かまわずなぐりつけた。たちまち敵味方5人の間に大乱闘が始まった。すると特高の一人が、突然「どろぼうだあ」「どろぼうだあ」とどなった。そこは自動車のカレージのすぐ前であった。ガレージの中には多数の運転手が休んでいた。それがいっせいに飛び出してきて特高に加勢したので、ふたりはすっかり包囲された。なぐられる。けられる。つきたおされる。よってたかってふんづかまえられ、たちまち縄を打たれて、トラックに積み込まれ、築地署に運んでいかれた⁶⁾。

手塚は後に、この赤坂の花柳街について書く。「多喜二やわたしたちがたびたび街頭連絡につかっていたところは、昼間はひっそりとして人どおりもまれない間はばぐらいの狭くて長い一本路の裏通りで、両側は待合よりは芸妓の住家らしい長屋ふうの軒並が目立っていた。電車の通りから最初の、やや斜めに入りこんだ路地で、二、三丁ほども歩むと、左手にしるこ屋とも仕出屋とも付かないような小さいこぎれいな一軒の店があった。そこはその細い路地の軒並から一間ばかりも奥まったところにあった。東京の街なかの一隅にこのように妙にひっそりと静まりかえったところのあることが印象的だった。

しかしまもなく、その道は非合法活動家たちのあいだでは案外知られていて、連絡につかい古されていた場所であることがわかった。わたしたちは注意し合って、その後連絡路につかうことをやめてしまった。

6) 江口, 386-6ページ。

かれ [=多喜二] が詩人の今村恒夫と赤坂のそのあたりで逮捕されたのを知ったとき、細心なかれが注意していた場所をなぜまた連絡につかっただろうかと、わたしは長年ひそかに不審に思っていた。抜け道もない一本道のことから特高たちの追跡から逃れることもむずかしかっただろうと思っていたが、その後、地下組織のなかにもぐりこんでいた三船というスパイの手引で逮捕され、連絡場所の三船がきめたらしいことを知って、いろいろなことがはっきりしてきたように思った。」⁷⁾

三船が場所を指定したのだろう。共青の責任者と、多喜二はなぜ会おうとしたのだろうか。分からない。三船は会うために適当な理由をもちだしたのであろう。三船は、多喜二の隠れ家を知らなかったのだろう。彼は多喜二と今村に会うこととし、そのまま警視庁に、その日時・場所を知らせたのだった。

2 多喜二を売った男

スパイ三船留吉は、秋田の農村の出身で、初め神奈川の組織で活動した。そしてその組織を警察に売り渡した。売る、というのは、警察に活動家たちの場所あるいは彼らの会う場所と時刻その他の情報を提供して、逮捕させることである。三船は東京に出て、1930（昭和5）年10月に、江東の全労亀戸分会に加わった。1931（昭和6）年半ばに、共産主義青年同盟（共青）に入り込んだ。炭鉱出身と称していた。このときすでにスパイとしての活動歴があったという。三船は、毛利基特高課長が労働係をしていたころから使っていた古いスパイで、その腕は高く評価され、スパイとしての格は大泉（山本・野呂委員長時代の中央委員——後述）より上だったろう、という。毛利基は、スパイを使って共産党弾圧をする名人だった。毛利に直接使われていたから、特高部内でも知らなかった。スパイは、警部と個人的に結び付いている。従って、党内スパイ

7) 手塚英孝「思い出をたどって」（『手塚英孝著作集』第2巻、新日本出版社 1982年）257-8ページ。

は他の党内スパイを知らないのである。特高のそれぞれの警部も、自分の使っているスパイ以外は知らない。ただしスパイからの情報は共同で利用する。毛利課長は、各警部からの情報を一手に集中した。

特高が、あるとき三船のアジト＝隠れ家を突き止めて踏み込み、逮捕してしめあげた時、毛利の直接の指示で彼を釈放したことがある、という。

非常時共産党時代の責任者（委員長）風間丈吉は、ソ連のクートペ（極東勤労者共産主義大学）帰りで、ほとんど共産党指導の経験はなかった。1931（昭和6）年5月、彼は上海のコミンテルン極東部を訪ねてから帰国した。コミンテルンとは、国際共産党である。日本共産党は、正式にはコミンテルン日本支部であり、しかしここでは略称として、日本共産党とする。日共はコミンテルンから巨大な活動資金を提供されていた。風間は、上海に次に送るべき使者を選ぶことになった。そして共青（共産主義青年同盟）からの報告者として武田を送ることが決定された。この武田とは、三船のことである。だが6月15日に、コミンテルン上海出張所（＝極東部）のイレレー・ヌーランとその夫人が、上海租界警察に逮捕された。三船は、風間らが指定した船に乗らず、1日か2日遅れて日本を出て、1週間ほどして、上海に何か事件が起こったので危険と思って帰ってきた、と言う。だが指定された船に乗らないということは、普通はありえない。

当時、共青の委員長をしていた岸勝——後に党中央委員になる。熱海事件で捕まる——が言う。松村昇が来て、共青からコミンタンに連絡に行く者を出してもらいたい。そして三船を指名した、と。岸は後で「ヌーランも三船に売られたんだな」と思った⁸⁾。この松村とは、本名は飯塚盈延（みつのぶ）で、超一流スパイであり、「スパイM」として知られる有名人物であり、風間時代の中央委員である⁹⁾。

松村が毛利課長から三船を連絡者にするように言われたのだろう。三船は中

8) 立花『日本共産党の研究』下、講談社。

9) スパイ松村について、松本清張『昭和史発掘』、立花、上、小林峻一・鈴木隆一『スパイM』文春文庫、にあり。

国官憲へヌーランの住所を教え、捕まえさせた。こうして日共は国際連絡線を失うのであった。

その年のうちに、ヌーラン事件のあと、三船は共青の中央委員に昇進した。そして組織部長になった。組織部長はスパイにとっては重要な職である。三船は、1931（昭和6）年に入党した。

三船は、1931年を通じてかなり共青の組織を警察に売り渡していたらしい。共青で、全国アド紛失事件（アドとはアドレスのこと。共青のメンバーの全国の住所録紛失事件）が起こった。三船が起こしたという説もある。そのため1932年の初めに、共青の組織が全国的に一斉検挙され、中央部員全員が引責辞任した。三船も中央委員の地位を解任され、共青神奈川県オルグに格下げとなった。神奈川で共青の組織の大半が破壊された後、三船は、熱海事件の直前に1932年9月に、再び共青中央委員に戻り、組織部長に就任していた。その部下には、スパイ今井藤一郎、事務局長伊藤律¹⁰⁾がいた。

1932（昭和7）年4月に、国際青年共産同盟（キーム）に派遣されていた源五郎丸芳晴が、モスクワから帰国した。彼が最高責任者として共青の采配をふるっていた。共青中央の会議に出席していたのは、源五郎丸、三船留吉、大内田太郎、石井照夫らであったと思われる。それに小松雄一郎である。大内田は、財政部長であって、静岡高校の出身である。石井は、三・一五事件の被告で、六高出身である。源五郎丸に次ぐ中央委員会の責任者は三船であった。彼は労働者出身の活動家とされ、堂々とした立ち振舞いであった。いつもダンディーな装いをしていて、パナマ帽をよくかぶっていた。¹¹⁾

10) 伊藤律がスパイだったとされるが、この時点ではまだである。1933年、伊藤は検挙され、特高に屈服し、共青中央の組織を売り渡した、とされる（共産党発表）。しかし当時はほとんど黨員たちは、屈服あるいは自白しているので、これをスパイとはいえない。伊藤は1939年に検挙されてから、毎月情報を提供することになった。（松本清張『日本の黒い霧』文芸春秋 1973年、186ページ）この時点からスパイである。しかし共産党はこの時存在していなかったから、それでスパイとするのは妙である。伊藤は北林トモの存在を知らせたとされる。そこからゾルゲ事件の発覚となる。だが最近の調べで、警察はゾルゲ・グループをおよがしていたことが分かった。

1932（昭和7）年8月の反戦デーの前後であった。小松雄一郎¹²⁾は、三船と二人で新橋駅近くを歩いていた。三船は、帝国主義戦争反対というスローガンについてこう言った。「帝国主義戦争というのは、必然的に起こるんだ。それに反対するというのは、まるで歴史の必然に対して反対するようなものじゃないか。」これを聞いて、小松雄一郎ははっきりと不審の念を持った。¹³⁾

1932年12月12日、小松は街頭連絡中、逮捕された。半年ほど前、会議を終え、三船と小松が車で帰ったことがあった。本来は避けなければいけないが、勧められるままに乗車した。そして小松が先に下車したのだった。その逮捕による取調べの中で、室外から、小松の住居を知らせる声が出た。小松は、三船に売られたと判断した。

組織の実態は、宮下弘警部らに筒抜けであった。小松に、詳細な共青の組織図を示された。宮下が調書を書くとき、供述が三船に関わると、宮下の万年筆は動かなくなった。調書になかなかその名前は記されなかった。

こうして、共青中央委員会を壊滅させる任務を、三船が完遂した。長谷川寿子は何度となく共青の中央委員が何名か集まった場で、三船への疑義を述べた。¹⁴⁾

寺尾としては、『伝説の時代』で書く。香川＝三船は、小柄で頭のよさそうな顔をしていた。彼と銀座の有名喫茶店ばかりで会った。その頃まだめずらしかったロイド眼鏡をかけて、いつも最新流行の背広やスプリングコートを着ていた。話をする時、どこかニヤケていた。委員長ともあろうものが、何故とくに人目を引くモダンな服装をするのだろうか、不審でならなかった。三船には、非情なやり手という評価がされていて、態度も自身満々という風に見られた。ハッター屋であったから、たしかに一見やり手のように見えた。

共青中央事務局長だった中島は、三船と連絡をとっていると、潤沢な資金に

11) 大塚茂樹『ある歓喜の歌』同時代社 1994年、63～64ページ。

12) ベートーベン研究家になる。

13) 大塚、65ページ。

14) 大塚、78ページ。

恵まれた、と言う。¹⁵⁾

1933(昭和8)年1月に再建された共産党中央委員会は、山本正美委員長、中央委員野呂栄太郎、同・大泉兼蔵であった。大泉は組織部長になった。彼はスパイである。組織部長は重要な役である。まもなく、谷口直平と、3月初旬に共青中央からとりたてられた三船が、中央に入って来る。谷口は、共青担当の中央委員である。貧農出身で、農民運動をした。農民部で大泉の部下だった。三船は谷口の推薦であった。共青組織部長は、三船のあと、スパイ今井がなった。党中央委員5名のうち、なんと2名が、スパイであった。中央委員候補には、山下平治、宮本顕治¹⁶⁾ なる。山下は労働者出身である。

三船は、中央委員になるとすぐ、4月末か5月初め、党東京市委員長(責任者)にもなる。東京市委員長・河島治作が、党資金をもって姿をくらましたからである。スパイ大泉が三船を抜擢したのだった。スパイの大泉は、三船がスパイだとは知らなかったであろう。三船の後任が宮本顕治となるのであった。そこ東京市委員会には、袴田里見、荻野増治がいた。荻野はスパイだとされたが、後に、党の査問を逃れて警察に自首した人である。

『赤旗』は書く。三船は、「[1933年]5月2日、午後8時銀座において、同志〇〇 [=中央委員谷口直平、中央委員候補山下平治] を己れの連絡線につれてゆき、計画的に配置された多数のスパイ [=警官] の手に同志〇〇を引き渡した。5月3日、午前11時、新宿中村屋2階で香川 [三船のこと] との連絡で、重要な同志×× [=委員長山本正美] が計画的に逮捕された。その前後も、全協東京支部および党地区、市大重要部分が計画的に彼の手で売り渡された……。」([] 内は筆者の補い)

三船は、山本委員長、中央委員、中央委員候補というふうには、中央委員5人のうち2人を警察に売ったのである。残った3人の中央委員のうち、スパイでないのは、野呂栄太郎だけだった。こうして野呂委員長により、党中央が再建

15) 大塚、79ページ。

16) (1908-) 東大経済学部卒業。「敗北の文学」で有名になる。作家・中条百合子と結婚する。戦後、共産党の委員長になる。

される。

東京市委員・袴田里見が、三船にスパイの疑いをもち、査問を要求した。5月ころ三船を査問することに決定した。査問委員長に大泉になったが、スパイがスパイを査問することになった。大泉は30分ばかりの形式だけの査問でごまかしたので、三船にはスパイの嫌疑なしとされ、三船は復帰した。だが袴田は再査問を要求した。袴田は誰に対してもスパイだと言うようになっていた。しかし結果的にはこれが当たるのである。さて再査問の直前、三船は姿をくらました。つまり、再査問を決めた翌日、三船は、各地区の責任者の会議を開くとして集め、それに応じて集まった人々とともに検挙された。偽装検挙である。獄中から「おれは監房のなかで、英雄的に働いている」というレポ（＝レポートあるいはレポーター）を届けた。しかし獄中の山本から、自分を売ったのは三船に間違いなく、三船はスパイだというレポが届いた。6月15日、三船は党を除名された。25才だった。

『赤旗』は書く。「メーデー闘争の前後、我党の指導的同志並びに東京市組織の一角を襲った検挙が極めて『計画的』なものであることを看破した党中央委員会は、『秘密活動の発覚した場合には、その原因を探求せよ』と云ふ三十二年テーゼの指示に従って、この原因を徹底的に追求して敵階級から我党に潜入せるスパイ挑発者香川（或は水原）——三船のこと、引用者——を摘発し得た。かくて党中央委員会は、スパイ香川を我党より除名追放することを決定する。憎むべきスパイ水原は断固たる階級的大衆的制裁によって断罪されなければならぬ」「香川の本名、写真、および詳細且つ正確な経歴は今調査中である。同志諸君は、彼の本名、写真、経歴等の知れる限りを党中央委員会に報告され度い」¹⁷⁾。

スパイ三船の「最近における挑発者の行為」を、『赤旗』は三段にわたって書く。しかし、どうしてそんな飛んでもない男を中央委員などにしてしまったのだろうか、という疑いが湧く。

17) 『赤旗』1933年6月21日。旧漢字を新漢字になおした。

留置場から出てきて、三船は再び党下部組織に潜りこもうとしていた。久喜という名を使ったことがある。だが、『赤旗』1933（昭和8）年8月21日号に、顔写真入りで除名の再広告「スパイ香川（本名三船）の判明せる素性」が出たので、行方知れずとなった。

「この破廉恥なるスパイ三船（香川）は、正体をあばかれる危険が迫るや、党の革命的断罪を恐怖して、秘密警察の指令によって、八百長的に逮捕され、二九日間の留置場生活の後、再び出て来て、x xあるいはx x [かつての江東の組織]にその姿を現し、憎むべし、機あらば、再び党攪乱のため活躍すべくねらっている。彼を発見し次第、断固たる階級的制裁を加へ、再びスパイとして潜入せんとするこの破廉恥漢の意図を粉碎せよ。」

査問されるどころまで危ない橋を渡った上で、また除名されたのに、もう一度下部にもぐり直そうなどと試みたものは他にいない。だから立花隆は予想する。三船は、もともと根っからのスパイだったのではないか、当局の雇われスパイではなく、当局の人間そのものだったのではないかと¹⁸⁾。三船は、非常に大きな役割を果たした謎のスパイであった。

3 戦前日本共産党とスパイ

小林多喜二は、スパイによって捕まったのであるから、戦前共産党のスパイ史をのべて、彼の逮捕を立体的に見ておく必要がある。

共産党は、第一次共産党 → 第2次共産党 → 再建共産党 → 武装共産党 → 非常時共産党 → リンチ共産党、という時代がある。

第二次共産党の指導者の一人、佐野学（早大講師）は、党の書類の2つを、元敏夫・渋谷空太（次）郎宅に保管を頼んだ。それらは黨員名簿を含んでいた。それが1923（大正12）年4月、警視庁によって発覚した。渋谷はスパイであった。1923（大正12）年5月下旬、そして6月5日、特高が共産党の一斉検挙を

18) 立花隆『日本共産党の研究』下、講談社 1980年、41ページ。

した。佐野は国外に逃れた。渋谷が寄食していた坂口兄弟もスパイであった。毛利基・特高課長が彼らをスパイに仕立てた。毛利はもと佐賀県警察部長であった。その後東京巢鴨署にいた。1942年の毛利の講演によると、毛利は彼らに接近した。第一次検挙も端緒はスパイだと、松阪は云う。

佐野学は、後藤新平の縁者であって、彼の兄弟・彪太が後藤新平の娘と結婚していた。

昭和4年ころ、警視総監は宮田光雄だった。特高課長は瀨瀬弥三であった。

当局の久保留次郎が、スパイ政策について述べているが、警察はスパイ対象者に対して、まず何よりも温情、なさけをかける、極力親切にする、一緒に飯をたべたり、病気になったら見舞いにゆく、報酬を与える、妻子に至るまで面倒をみる、べきであるという。「いいスパイを使うこと」これが思想警察の合言葉であった、と云う。¹⁹⁾

三・一五事件(1928年)では、スパイは、東京の北浦千太郎、大阪の岸野重春であった。しかし北浦はスパイとしてどれほどであったか確認がとれない。また岸野は、三・一五を逃れた大阪の幹部を売っただけである。

五色温泉の共産党大会が開かれたことを、1927(昭和2)年2月12日に、加藤希一²⁰⁾が、特高の浦川・労働係長に告げた。そのうえ、日下部千代一が重要な情報を特高に渡した。党员暗号リスト、指導部のアジトである。特高はもちろん暗号を解読した。これは三・一五事件の約1年前のリストだが、決定的だった。関東地方評議会の書記・本沢兼治がスパイであった。もちろん、以上の人々以外にもまだいる。²¹⁾

初め、スパイとは、警察官のことであった。思想担当刑事で、直接、活動家を尋問したり、尾行した人々である。しかし特高は、本来のスパイを思いだした。スパイには2種類あった。1つは、警察官を党に潜り込ませてスパイをさせる。2つは、党员をスパイに仕立てあげる。というものである。三船は、そ

19) しまね きよし『日本共産党スパイ史』新人物往来社、69ページ。

20) 下里『五色の雲』新日本出版。

21) この再建された第2次共産党は、東京・赤羽に本部をおいた。

の第1のタイプかもしれない。警察が党内機密・状況を知るには、党員を逮捕して、拷問にかけ、自白させるのだが、ほとんどの党員は自白してしまった。こうして党は、芋づる式に弾圧された。だが、スパイの利用の方が効果的であった。そこで、捕まえた党員をスパイになるよう誘った。特に、特高が党中央委員クラスにスパイを持つと、非常に有効なので、特高はそれをねらった。

共産党は、こうして特高のスパイ政策によって壊滅させられたのであった。

ここでおおまかに、その後の共産党諸指導部の推移を示しておこう。

3・15(1928年)と4・16(1929年)の大弾圧で、経験のある党員はほとんど捕まっていた。残った経験のない人々が、それ以後の運動を指導した。党は現実では下降線を辿っていたのであった。ただし、主義としては、隆盛のように見えた。

1929(昭和4)年の4・16事件後、すぐ7月に共産党は再建され、23才の田中清玄、24才の佐野博らによって指導された。武装共産党といわれる時代の始まりである。指導者の年齢が非常に若いことに注目したい。つまり余り人生経験がないのである。1929年から日本共産党の指導部にいた田中清玄の極左主義、翌年の竹槍武装メーデーのように、運動の一線の活動家が武装闘争に重きを置き、短刀などを所持する例が多くなった²²⁾。1930(昭和5)年7月14日、中央委が全部やられた。かれらが捕まったのは、スパイ小曾根によった。

水野成夫らを中心にして解党派ができた。1930(昭和5)年6月、彼らは日本共産党労働者派を造った。解党派に呼応して労働運動でも全協刷新同盟ができた。

1931(昭和6)年1月から1932(昭和7)年10月までが、非常時共産党の時代である。風間丈吉委員長、岩田義道、紺野与次郎²³⁾、上田茂樹²⁴⁾が、中央委員会を再建した。風間は、新潟の農家の生まれで、上京して労働者になった。組合員だったが、クートベ(極東勤労者共産大学)へ入学した。「三一年政治テ-

22) 大塚茂樹『ある歓喜の歌』同時代社 1994年、22ページ。

23) 紺野は、『日本の夜明けをめざして』共産党 1966年、を書いている。

24) 上田(1899-1932?)『上田茂樹著作集』(新日本出版社)あり。

ぜ草案」をもって来た²⁵⁾。1930(昭和5)年11月に帰国した。紺野(1910-)は、山形高校を中途退学し、共産党に入り、東京地方委員であった。プロフィンテルン第5回代表の1人として、モスクワへ行った。風間とほぼ一緒の12月に帰って来た。

ここにスパイ松村、つまりスパイM(本名、飯塚孟延=みちのぶ、あるいは、みつのぶ)が登場する。風間は、ほとんど共産党指導の経験はなかった。スパイMもクートペ帰りである。「クートペ出身者はすぐ落ちる」(=屈服する=転向する)と警察側では言われた。

さて風間委員長時代は、中央委員でスパイ松村が、ほとんど重要黨員を知っていた。彼は組織・資金部の責任者であり、毛利特高課長に、いつでも彼らの住所を知らせることができた。毛利は、あるとき、日本の共産主義運動はおれの掌の上にある²⁶⁾、と言った。松村を使っている時であろう。それは全く正しかった。共産党の重要な動きは毛利に筒抜けだった。それに、毛利は松村とともに、共産党壊滅の脚本を練った。

党が風間とスパイMによって再建された。だが正確に言えば、毛利課長によって再建されたと言える。

スパイ松村(=飯塚)は、本部が亀戸にある東京合同労組に、1925(大正14)年、峰原暁助という名で入った。そして紡績工場の争議応援に加わった。合同労組では2年かそれ以下の活動であった。彼は、江東の労働者として黨員になった。彼は思想的にしっかりしていなかったので、クートペへ送られることになった、という。それが事実なら、これは変な取扱いである。丹野セツの話では、こうだ。「松村という男がいたが、あの男は傾向が悪いから、モスクワにやって、鍛えてもらおうと言って、向こうへやった。」²⁷⁾ もちろんこの話が正しいかどうか分からない。とにかく彼は、渡辺政之輔の推薦でクートペへ送られ、ソ連ではヒヨドロフと名乗った。飯塚は社会主義を実際に見て、幻滅した。

25) 風間文吉『非常時共産党』(三一書房)。

26) 下里正樹『日本の暗黒』(新日本出版社)。

27) 安田徳太郎『二〇世紀を生きた人々』青土社 2001年、163ページ。

スターリン時代が始っていたから、これは当然でもあった。帰国してから日本の共産党員の姿をみて、また失望した。こういう共産党はなくしたいと思った。彼は帰国後すぐ、スパイになることになった。警察に捕まったか、松本清張が推測するように、毛利と偶然会ったか、どちらかのきっかけであった。1930（昭和5）年7月14日、午後10時に彼は祖師谷で逮捕された。そしてスパイとなり、風間、紺野、岩田のビューローに入る。ここで鈴木鱗蔵などを売った。松村（＝飯塚）はスパイとして非常に有能であった。風間委員長の時代理は非常時共産党といわれ、1931（昭和6）年になって本格的な活動を開始する。風間、岩田、紺野、スパイ松村が指導をした。かれらが中央ビューローを造った。風間と岩田は、松村を信頼した。松村は海外連絡ルートを握った。共産党が再建されると、共青も再建された。ここにスパイMが接近した。シンパ（党への同情者）の線もMが握った。スパイMは非常時共産党の金と組織を一手に握っていた。技術部（略称、テク）は、すべてスパイMが担当し、ここは、資金、家屋＝アジト＝隠れ家、印刷、武器などを扱った。これは後に家屋資金部になった。スパイMは、1931（昭和6）年5月ころ、家屋資金局のキャップ（＝責任者）になった。これは、それまでの家屋部・資金部・事業部・地方部を統合したものであり、アジトを用意したりした。彼は組織局長も兼任した。風間委員長はスパイMに全幅の信頼をおいた。これらの活動は中央委員会に知らされなかった。テクのキャップ格には長谷川茂がなって、スパイMに指導された。

党の同情者からの資金カンパは多量なものだった。最終的にはスパイMがこれを管理した。インテリのカンパは、杉ノ原舜一が集めた。当時日大教授であった。安田徳太郎の話はこうである。杉ノ原は安田の所へきて、日本共産党への資金提供を申し込んだ。安田は断わった。「日本共産党に金を出すと必ずばれる」と返答した。杉ノ原は、「私は上部へは決して報告せず、何百人の名前と金額は自分の胸一つにおさめて、もらすようなことはいたしませんから信用してください」と言った。しかし警察に捕まって杉ノ原は全部喋ってしまった。安田を取り調べた警視庁の野中警部は、それを聞いて「あいつ、そんなことをぬかしたか。あいつはおもしろい男だ。たたけばたくさんほりを出す男だ。

これ、見てみろ。四四〇人ばらしているぞ」と言って、安田の前に厚い調書を突き出した。調書をめくって見ると、なるほど一人一人の名前の下に、年月日と、もらった金額まで、ことこまかに自供してあった。「杉ノ原さんは大学教授だけにすごい記憶力ですな」と言ったら、「その通りだ」と野中は言った²⁸⁾。

テク時代では、長谷川の次にキャップ格になる久喜勝一よれば、シンパ層が広範囲にわたっていて、学者では三木清、大塚金之助、河上肇が、大口カンパをした。資金部時代では、杉ノ原の上に石田がいて、その上にMがいた。石田によれば、金持ちや立派な人がカンパしてくれた。有名な作家や学者、左翼とはいえないような人もカンパした。高見順、窪川稲子、壺井繁治、太宰治、学者では山田盛太郎、平野義太郎、林達夫らであった²⁹⁾。大塚金之助たちは、杉ノ原が警察でペラペラ喋ったので³⁰⁾、捕まることになる。

1931（昭和6）年4月に、「政治テーゼ草案」（三一年テーゼ）が発表された。これは「二七年テーゼ」が誤っていたとした。つまり「二七年テーゼ」は、明治維新をブルジョア革命とし、現在（＝当時）の日本を金融資本独裁とした。野呂栄太郎は、これには賛成できなかった。1932（昭和7）年にコミンテルンの「三二年テーゼ」が発表された。河上による翻訳である。同年5月から『日本資本主義発達史講座』が刊行された。

共産党の事件としては、1932（昭和7）年10月に大森銀行ギャング事件が起こされた。川崎第百銀行大森支店で、である。松村が、党財政の逼迫を理由にこれを起こさせたものだった。党財政の逼迫の原因は、党機関紙の活版化、自動車・家屋の購入である。松村（＝飯塚）は意図的にこれらを行なった。党組織に無闇に金を使わせたのである。彼は家屋・資金部の部長になった。だいたい共産党が自動車を買う必要はないし、当時とはとても値段が高い。彼は、アジトを確保するといって、家を買った。党機関紙の活版化は、当時の共産党は喜んだし、多分現在でも高く評価されているかもしれないが、もちろんその必要

28) 安田、173ページ。

29) 小林・鈴木『スパイM』第4章。

30) 大塚金之助、筆者に語る。

はなかった。それはスパイ松村の計画だった。活版化には大変な費用がかかるのである。1932（昭和7）年4月8日付けの『赤旗』から活版が始まった。A3版で8面、発行部数は7千であった。月5回の発行である³¹⁾。7千部もの発行は多すぎるし、それも、弾圧と資金欠乏で、数カ月続いただけであった。

銀行ギャング事件は、スパイ松村が起こした、あるいは誘導した。多額の資金を使ったので、どうしても党資金が必要だと言って、一部党員を納得させたのである。しかしスパイ松村が銀行襲撃をしようと言ったとしても、銀行ギャング事件を起こす党員たちの方も問題である。そしてその責任は免れられない。松村が銀行ギャング事件を計画したのは、共産党を道徳的に権威失墜させようと思ったからである。これはうまくいった。1932（昭和7）年10月6日、大森区の川崎第百銀行大森支店を、3人の男が襲って、約3万1千円を奪った。その金を新郎新婦の式服を着た者の乗る車に積んで、彼らは逃げた。それをスパイM=松村に渡した。スパイMはそれを警視庁に渡した。そしてその一部は着服した。

松村は、これ以外に、現金拐帯事件、筒もたせ事件などを、誘導した。松村は、統率力があり、親分肌であった。理論家でないから、論文・文章は何も書かなかった。彼は、外国=コミンテルンとの連絡も担当した。つまり膨大な活動資金のルートを握ったのである。

10月30日（日曜日）全国代表者会議を熱海・伊藤別荘——紺野によれば、堤林別荘——で開くことになった。これは山形県の五色温泉以来の7年ぶりの大会であった。「三二年テーゼ」の承認が必要だったからである。三二年テーゼには、ソ同盟擁護のスローガンが入っていた。スターリンが入れさせた。全国会議といっても、そこに集まる地方代表はほとんど中央からのオルグだった。この会議の開催をスパイMは毛利に知らせるのだ。この会議は毛利と松村の合作であった。警察は、一網打尽にしようと準備する。当時警視庁は内幸町にあって、1931（昭和6）年5月に新庁舎が完成していた。警官隊がここから

31) 林田茂夫『「赤旗」地下編集局員の物語』（白石書店）1973年、55ページ。

出発した。だが、松村は、委員長・風間に、前日29日にこれの中止を進言した。新橋の正求堂ビル四階にあって、開拓社と看板をかけた共産党中央のアジトで、中央委員会が終ってから、風間に言ったのである。どうも危険だと言うのである。風間は、こういう案件の責任者である松村の進言なので、承諾するより他はなかった。松村は単純なスパイではない。中止の件は毛利に知らせなかった。そこで、熱海の参加者たちは半ば帰ったが、帰らなかった11名が逮捕された。9人の地方代表と2人の警備員であった。そこでは中央委員は捕まらなかったが、スパイMの通報で、同日中央指導部が相次いで逮捕されてしまった。風間は松村と歩いている時に捕まり、紺野は同日早朝、支持者の家で捕まり、岩田義道は午後3時、神田で捕まり、岩田は数日後特高に虐殺された。これはスパイ松村の手引だった。こうして風間時代が終る。熱海事件以後、松村はぶつり姿を消すのである。

10月の党組織壊滅後、党臨時中央部ができたが、検挙された。

1933（昭和8）年1月18日には、前年の10月30日事件（熱海事件）が新聞で知らされた。この日まで検挙者は1504名にのぼっていた。最大時1500人の党員を誇っていた日本共産党が、ほぼ崩壊したのである。党最高実務者、スパイ松村（＝飯塚）は、身を隠した。彼は熱海事件から突然いなくなった。共産党に隠れて豪勢な生活を一時期していた。戦後の1966（昭和41）年、北海道で死んだ。特高の弾圧で地下共産党は壊滅状態にあった。だから彼の行動を十分チェックするものがいなかった。

松村の登場は、党の再建ということで組織自体にスパイを許す弱さがあった。

スパイ松村（＝飯塚）は、共産党をたびたび警察に売って壊滅させようと思ったのではなかった。彼は共産党を大きくしておいて、一気に壊滅させようとした。それは彼のスパイとしての存在にとっても有利であった。何度も警察に手入をさせれば、結局は、疑惑が彼の方向に向いて来るからである。それに、どうせ弾圧するならば、小さい組織でなく、大きな、あるいは大きくなった組織の方が、ずっとよい。自分を警察に高く売れるのであった。彼は、共産党が大きくなるのを手ぐすねひいて待っていた。彼の謀略はスケールが大きかった。

彼は共産党をほとんど一網打尽にしたのだった。

再建された党中央と共青中央に深く関与したスパイMこと、本名・飯塚盈延は、スパイとして情報を当局に流し、同志を売り続けていた。至る所にその種の人物が潜入していた。革命運動の陣頭に立たんとする人々は、その事実を獄中にたどりついても知り得なかった。ひたすら活動し、やがて獄舎へつながる道を多くの若者たちが歩いた³²⁾。

スパイ松村による、大森銀行ギャング事件、熱海事件、そしてそれに続く幹部の逮捕で、党は弱体化した。共産党が壊滅するにさいして、歴史的には、松村の役割が一番大きかった。

皮肉なことに、松村が活躍している時期に、日本全国の大学、高校、中学で、マルクス主義、社会主義、共産党の人気は、非常に高かった。

当時、特高部長は安部源基であった。特高課長が毛利基であった。特高第一係が共産党を担当し、第二係が右翼を担当した。第一係長は毛利が兼任した。第一係の党担当は、中川成夫、鈴木匡で、共青担当が、山県為三、庵谷治家であった。庵谷の部下が宮下弘警部補であった。

毛利の経歴はこうである。

1891(明治24)年に、福島県に生まれた。父の死で中学を中退した。努力の人で、試験を受けて、1915(大正4)年、警視庁巡査となり、巢鴨署の高等課労働係となった。猛烈に勉強をし、また第1次共産党、第2次共産党の取締りで、実績をあげた。特高課労働係次席になり、1929(昭和4)年に特高係長になった。1932(昭和7)年、拡充された特別高等警察部の最初の特高課長になった。その後、異例の出世をした³³⁾。彼のような有能な官僚がいなかったらならば、共産党も少し延命できたであろう。

風間丈吉委員長時代に、野呂栄太郎は秘密に中央委員候補になっていた。彼

32) 大塚茂樹『ある歓喜の歌』同時代社 1994年、47～48ページ。

33) 小林・鈴木『スパイM』(文芸春秋)。

が黨員だとは誰も知らなかった。岩田義道だけが彼と連絡していた。野呂は1932（昭和7）年2月、中央委員になった。1932年10月の大検挙＝熱海事件の時に、野呂は、残されたただ1人の中央委員であったとされる。中央委員になった大泉は、毛利課長と会っていた。野呂はその後中央委員になったが、秘密にされた。

1932（昭和7）年暮れころ、野呂栄太郎を中心に党再建運動の1つが行なわれた。彼は非合法生活に入った。1932年12月中旬、山本正美がモスクワのクーデタから帰国した。彼はソ連では「アレクセーフ」というペンネームであり、日本では「アキ」の名で知られていた。モスクワ帰りなので、日本では期待されていた。彼は7年もモスクワにいた。そして「三二年テーゼ」作成に関与した。山本は、1932年8月ころにモスクワを出て、日本に向かった。1933（昭和8）年1月下旬に、山本は中央委員会を再建した。こうして山本委員長時代がくる。

多喜二の虐殺は、したがって山本委員長時代である。小林多喜二が逮捕されたことにたいし、当時でも現在でも、心ある人々は、残念だと思うであろう。だが、多喜二が逮捕されなかったらという仮定は、無理であった。風間委員長時代は、中央委員でスパイ松村が、ほとんど重要黨員を知っていた。彼は毛利特高課長に、いつでも彼らの住所を知らせることができた。松村が姿を消してから、彼の後に三船がスパイとして活躍した。山本正美委員長時代には、中央委員にスパイ大泉およびスパイ三船がいた。

多喜二が入党したのは、1931（昭和6）年10月である。多喜二を党に推薦したのは、宮本と蔵原ではないか、と江口渙は言う。その時は、いわゆる非常時共産党（風間）の時代、あるいはスパイ松村の時代である。松村は共産党撲滅のために手ぐすねをひいていた。多喜二がこの時逮捕されなくても、近い将来に必ず捕まってしまうのであったのである。

実際は、多喜二はもっと早く捕まっていた可能性があった。今村恒夫は作家同盟で多喜二と知り合っていた。三船は共青で今村と知り合っていた。前述のように、三船が「しばらく前から」3人での会合を申し入れていたとすれば、

つまり2月20日の前にもし3人で会うことにしていれば、捕まってしまうであろう。

大泉兼蔵は、新潟県で農民運動をし、そこでスパイになっていた。彼を毛利警部が使っていたが、熱海事件直前、1932（昭和7）年7月に、党中央委員候補になり、10月に中央委員になった。1933（昭和8）年5月に山本委員長は検挙される。

1933（昭和8）年に党中央委は、Mがスパイだったと見なした。山本委員長が逮捕されたので、野呂が責任者になった。野呂委員長時代がやって来た。それは、5月から11月までなので、7カ月弱である。野呂、大泉、三船が、中央委員であり、後に宮本、逸見重雄³⁴⁾、小畑達夫³⁵⁾が中央委員に加わった。小畑は、1929（昭和4）年に上京し、郵便局員になった。全協に入って、組織部長となった。全協秋田地区協議会を作ったことがある。1932（昭和7）年秋に入党し、1933（昭和8）年9月、財政担当になり、10月に財政部長になった。当時、東京市の組織で働いていた袴田里見は、大泉に疑惑をもった。それを野呂に言ったが、野呂は大泉を信頼していた。

1933（昭和8）年6月10日には新聞で、巨頭、佐野学・鍋山貞親の転向が発表された。第二次共産党の指導者・佐野学は、獄中で鍋山とともに「共同被告同志に告ぐる書」を発表した。この転向は共産党に最大の影響を与えた。これによって党員の約半数が動向した。ただし戦前の共産党員は終戦までにほとんど転向している。転向しなかったのは、宮本、袴田、志賀義雄、福本などである。転向の形態には種々ある³⁶⁾。

戦前の共産党は、末期になればなるほど、スパイに跳梁された。といっても、スパイの数はそれほど多くはなかった。共産党は常に弾圧を受け、つまり指導者が検挙された。そのため、経験が浅くても短期の党歴でも、党員を上級委員に抜擢しなければならなかった。スパイもそのため、指導的ポストに就いてゆ

34) 逸見（へんみ）。京都学連事件の被告。野呂の秘書役。小畑の前の財政部長。

35) 小畑。1907年、北秋田郡二井田村（現大館市）生まれ。

36) 思想の科学『転向』三部作、平凡社。

くのである。また党員が逮捕される時に、スパイは温存されやすい。

共産党は、こうして特高のスパイ政策によって壊滅させられたのであった。特高は共産党以上に共産党を知っていた。もちろん壊滅の理由は、他にもある。共産党あるいは日本の民主主義は、戦前の国家権力にくらべて弱かった。天皇制とその思想は強かった。人民は党を支持することが少なかった。ファシズム国（日本もその1つ）の党の状態は困難であった。コミンテルンはその支部をひきまわした、などである。

当局は、1933（昭和8）年末には「運動著しく衰微しつゝあり」との認識を示し、さらに1934（昭和9）年11月には「運動著しく鎮静に帰しつゝあり」と自信のほどを示すのである³⁷⁾。この後、共産党ではリンチ事件が起き、大泉がスパイであることが発覚した。だが大泉は逃亡した。小畑は、スパイかどうか分からないが、査問で、宮本顕治、袴田らによって死に至らされた。宮本らは捕まった。

1935（昭和10）年には最後の中央委員袴田里見が捕まって、ここに戦前の党は消滅した。戦前の日本共産党は、一つの思想運動であった。正式には合計10年間存在した。この運動は若い人がおこなったもので、ほとんど20才台の人々であった。

多喜二が殺される時、共産党は事実上壊滅状態であった³⁸⁾。スパイ松村とスパイ三船の存在で、共産党はスパイ恐怖症におちいり、リンチ共産党事件を起こし、これで壊滅するのであった。

37) 荻野富士夫『増補 特高警察体制史』（せきた書房 1988年）236ページ。

38) 本節は、拙稿「経済学者 野呂栄太郎」（『商学討究』45・2）と少し重複していることをお許し願いたい。重複部分をカットすると全体像が現れないので、やむをえずそうしたのである。